



## 「清教学園 戦後設立の意味」

2022年8月



河内長野教会牧師 森田 恭一郎

エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。  
「もし、この日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、  
それがお前には見えない。」  
(ルカによる福音書 19章 41～42節)

主イエスはエルサレム入城に際して都のために涙を流されました。それは、当時のイスラエル指導者がローマ軍と戦うことを選んで、戦いに負け、いずれ都は陥落することになるからです。そして「お前も平和への道をわきまえていたなら……」と言われたのでした。

8月になりました。日本にとって平和を祈念する月です。日本もまた近現代史において、戦うことを選び、第二次世界大戦で敗戦を迎えました。日本のみならずアジア太平洋地域でどれ程の命と生活を奪うことになってしまったことか……。

今回の文章で、日本国憲法を思い起こしたいと思います。日本国憲法は、基本的人権と国民主権に並んで平和主義を謳う憲法です。国際紛争を解決する手段としては、戦争を起こし武力による威嚇も行使も放棄する第九条が有名ですが、前文もまた平和を謳ってやみません。前文の「平和」の用語を記す部分だけでも思い起こしてみましょう。「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」。戦後、政府は、自衛隊の存在や海外派遣、核の保有、敵基地攻撃能力等、憲法解釈上許されるか議論します。実際の政策判断は高度化専門化していて安易な批判は慎まねばなりません、法論理上出来るかどうかではなく、平和を決意したということは忘れてはなりません。そのためにも、国会の開会にあたって毎回、議員は全員で日本国憲法前文を朗読したらいいと思う程です。

もう少し前文から引用します。「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う」。高校生だったとき社会の授業で先生が次のように語られたことが何故か記憶に残っています。「第二次世界大戦は帝国主義で始まり、平和主義で終わった」。それで制定されたのが日本国憲法ですが、この前文も帝国主義から平和主義への転換を高らかに謳っています。先月の井上良作理事長の「今月の聖句」の欄に「国民の自覚と不断の努力によってのみ維持されます」とありました。日本の選挙についてのお言葉でしたが、平和の維持も、自由と権利（憲法第12条参照）も同じです。思えば維持とは、放っておいても自然に維持されるものではなく、国民の自覚と不断の努力によって形成し続けてやっと維持出来るものです。

清教学園は戦後になっての設立です。帝国主義から平和主義への転換を踏まえ、それに相応しい人材を育てる人格教育を目指して設立しました（例えば中山昇著『芽生え育て、地の果てまで2』第2章中学開校式、の文章もとても教えられます）。また清教の目指す人間像の第三項目に「隣人と共に平和を築く」と掲げているのも、近現代日本の歴史的反省と現憲法の理念を踏まえての、意味深い言葉だと思います。

「平和への道をわきまえる」(ルカによる福音書19章42節) 人材の育成です。

